

「弘法字尽」の研究——『瑠玉集』の諸本研究の一として——

丁 海 鈴

第一章 はじめに

第一節 研究のきっかけ・成り立ち

『瑠玉集』は、序文に「開^ニ一字篇作^一以合^ニ本字^一綴成^ニ三言^一」とある如く、漢字一字を扁旁に分解して本字を合成する方式で、三字を一句と成して各々の字に訓みを示し、初学者の漢字習得に便ならしめた書である。真福寺本の序文に「康応元年上旬信州小菅山眠居比丘円一謹記之」、天和版の跋文に「康応初元南呂上旬 信州小菅山眠居比丘円一跋」とあることから、南北朝時代、康応元年（一三八九年）の成立で、編者は小菅権現（長野県下高井郡瑞穂村、奥社は小菅山腹に、里社は村内北大門にある）の神宮寺、大聖院元隆寺の僧、円一であったことが知られる。また、『瑠玉集』には『弘法字尽』（貞享頃、山形屋吉兵衛刊本の内題）・『小野篁離合歌』（天和三年版の外題）等の別名があるが、これらは、真福寺本の序文に「吾朝^{ニハ}高野大師和^{シテ}大経^ノ四句^ノ偈^ヲ一^ニ作^ニ仮名^ノ字^ヲ一^ニ……今大師之和^ニ此^ノ偈^ヲ一^ニ准^{ナソラヘテ}仮名^ニ顯^ス真^マ字^ヲ一^ニ然則書^{カキ}誦^ム是^ラ人^ハ唯非^レ知^ルニ世間^ノ仮名^ノ字^ヲ一^ニ当^ニ開^ク出^セ世無^レ為^ノ悟^ヲ一^ニ者哉^一」、天和版の跋文に「余嘗^テ遊^フ羽州^ニ之日、老父抱^ニ書^一一軸^ヲ一^ニ来^テ謂^テ曰^ク、伝^ヘ聞^ク、此^ノ書^ハ小野^ノ篁^ノ之草^{ナリト}也、雖^{トモ}然^{リト}、久^ク棄^キ置^チシテ古寺^ノ篋底^ニ一^ニ聞知^{スル}者^ノ鮮^レ矣、今^マ将^ニ蠹滅^{セント}一^ニ、請^フ

加へ私語^ヲ「点^セハレ之^ヲ可^ナラン也」とあるのに由来するものであろう。本文は、真福寺本が五四三句一六二九字、梵舜本が五九八句一七九四字で、諸本により多少の増減が見られる。今日の常用漢字一九四五字と照らし合わせると、それぞれの時代の基礎漢字の数を考えるうえで興味深い。

今回調査したテキストは左記の通りである。以下、括弧内の略号を用いることにする。

1. 安政六年奥田義雄模写真福寺本（真福寺本）
2. 東京大学所蔵室町後期写本（東大本）
3. 慶長二十年梵舜写本（梵舜本）
4. 天和三年刊小野篁離合歌（天和本）
5. 貞享頃刊弘法字尽（貞享版）
6. 国立国会図書館蔵本（国会本）

第二節 先行研究の紹介と問題点の指摘

川瀬一馬氏は、『増訂古辞書の研究』において、①真福寺本、②天和三年版、③富岡鉄斎旧蔵本、④静嘉堂文庫蔵本、⑤愛知県第一師範学校蔵本、及び新たに発見された⑥慶長二十年写本（梵舜本）の諸本を紹介し、各々の書誌的解説をしている。そして③④⑤は、真福寺本を転写したものであることを明らかにした。

また、室町初期の書写である真福寺本には、五葉にわたる長文の撰者円一の自序があるのに対し、天和版には、序がなく、その代わりに数行の短い跋文があることについて、「まづ最初に天和本の如き跋文を草した後に、又改めて真福寺本の如き序文を作つたものと推定せられる」とされた。また、『瑠玉集』に多く見られる変則的な要素については、「全巻に道德的な

教誡を織り込まうと意図した事が強く伺はれる点は最も注意すべきであると思ふ」と教科書としての性格を強調しつつ、あえて機械的な配列をして、読者の興味を引いたものと積極的に評価している。

杉本つとむ氏は、『異体字研究資料集成』第九巻の『瑣玉集』解説において、書名の意味と読み方について論じ、多様な解釈の可能性を指摘しつつ、「サギヨクシュウ」「シヨウギヨクシュウ」の両方の読み方が可能であると述べている。

内容については、文字入門、手引き書として評価し、「文字の構造とその意味、さらに書法——天は天一ではなく、一大と書くように——をも教示している点、なかなか行届いた方法をとっている」と述べている。ここで「天」の字を例にして、筆順についてまで教えているように氏が考えられているのは、「澗間水」等の反証もあり、やや行き過ぎであるが、文字の学習書という理解は正鵠を得たものである。また本書の大きな特徴であるところの、三言を一句とし、二句で一聯とする構成について、「中国(宋)の『三字経』で、へ人之初性本善、性相近習相遠」といった三字単位による道德教育書と構成において近いところもあろう」と、一つの解答を示されている。

両氏とも本書の性格を論ずるに当たり、序文と跋文を採用しているが、それは、ともに編者の手になることを前提としているものと理解される。

川瀬一馬氏と杉本つとむ氏の研究により、主要な諸本の紹介と、各々の書誌学的考察がなされているものの、著述の意図については、未だ十分に説明されていない。杉本つとむ氏の、本書が文字入門、手引き書であるとする指摘自体は正しいものの、具体的な論拠が十全に示されていない憾みがあると言わざるをえない。

そこで、本稿においては、本文に標出されている漢字の字体および種類を調査することにより、どのような用途を主眼とした漢字教育書であるかを考察しようとしたものである。

第三節 『瑠玉集』の位置づけ

『瑠玉集』は、成語・熟語をさらに砕いて、一字一語の文字を集めて、これを分解した上で、もう一度統合して意味と読みと書きとを、同時に教えるように工夫した教科書である。記憶し易く理解し易くして、初学に対する学習効果をあげようとする教育的工夫が用いられている。江戸時代になって刊行を見た『小野篁離合歌』や『弘法字尽』は、いずれも、いくらか異なりがある『瑠玉集』（ショウギョクシュウ）の諸本である。江戸時代に出現した『小野篁歌字尽』は、この書の着想を初学者向きに展開したものである。ここでは、江戸初期（慶長二〇年一六一五年写し）梵舜本は、梵舜（龍玄）が書写したもので、内容は、二九九聯、五九八句、一七九四字を収めてある。その中には他の五本に見えないこの本単独の句、六一句を含む。形態は、総振り仮名（返り点・片仮名）つき、三字一句を一団として四団を縦一列に配してあり、楷書に近い行書体である。次に句数が多いのは、江戸前期にはいつて刊行された『弘法字尽』（山形屋吉兵衛梓、貞享頃（一六八四―一八七年）刊）。内容は、二八六聯、五七二句、一七一六字を収めてある。収めた具体的な語句そのものには変異がある。形態は、一字一字放ち書き、二句六字を一行に仕立ててある。総振り仮名（返り点・片仮名）つき、楷書体である。

第四節 本文の検討

諸本六本を整理した結果『弘法字尽』のみある四四句に検討を加える。これを⑨⑬『説文解字』（セツモンカイジ）で調査する。後漢の許慎著で、扁旁により漢字を分類した中国最初の部首別字書である。全一五篇（叙文一篇・本文一四篇）。書中、戦国時代以来通行していた字形構造の原則「六書」^{リクシヨ}を説き、定着させている。字形の分析を出発点として、扁や旁などの要素により文字を分類収録し、九三三三字を五四〇部に収める。又、もう一冊『大廣益會玉篇』（ここでは『玉篇』と略称する）。六朝梁の人、顧野王の撰の古本『玉篇』を簡略にして、宋代に再編されたものである。部首は「一」部から「亥」部まで、ほぼ『説文解字』に従うが、やや異同を含む。全体五四二部であるが、それは『説文解字』から一二部を除き、新た

に一四部を追加したもの、総部数では二部ふえたことになる。収録字数は一万六九一七字で、『説文解字』の九千三百字あまりに比べれば、はなはだしく増加していることがわかる。次に、日本では平安時代末期の観智院本『類聚名義抄』で調べる。部の立て方は『玉篇』によりながら、相似たものを隣に置くようにし、字数の少ないものは雑部にまとめてある。このように、字書によって、編修の都度工夫が加えられたことが著しいが、いずれにせよ、漢字には形声・会意の字が多く、ことに大部分は形声字であるところから、意符にあたるものを引き出した部を編成するところの字形による分類はそれ自体、結局一種の意義分類をなすものであつて、字形引きのための分類が同時に意義の大略の分類を兼ねることになる。そして、これが漢字を常用するものにとつては、有効な分類であり、したがって字一つ一つの検索法を形成することになる。しかし部首をなす字が、すべて、そのままの形で実用面に多く出現するわけではなく、その字音・字訓が広く知られているとは限らないので、部首名称についても音よみ、訓よみなどさまざまである。

第五節 研究方法の説明

『瑠玉集』において基準とされている漢字字体について考察する。各例の頭に掲げた数字は筆者が作成した。前掲、真福寺本・東大本・梵舜本・天和版・貞享版・国会本の順で、六本の対照校本に付したものである。各々の内部における通し番号をしめたものである。（なお、諸本ともに乱れが激しく、底本とすべきものがないので、ここで挙げるテキストは、諸本を校訂したものである。以下も同じ。）

まず、『弘法字尽』のみ見える四四句の漢字がある。部首別にそれを確認してみると、漢字の部首が片寄りがあるので部首別に分けてみると、心部二十句、人部七句、言部七句、その他部十句のように分類できる。それを部首に相当する字を除いた三字の中で他の二字について分ける。『説文解字』と『玉篇』に見られるかどうかを確認する。次に、観智院本『類聚

名義抄』には漢字と和訓が見られるかどうかを確認して図に示した。

第二章 『瑠玉集』の研究

第一節 弘法字尽のみある4句

I、【心部】20句

①

36 念^{ナモヒ} 心^ニ 愼^{ヲモフ}

〔心(こころ)に念(おもひ)愼(をもう)〕

『説文解字』には「念〈常思也从心今声〉」とあり、『廣韻』去声五十六・榛には「念〈思也又姓西魏太傅念賢奴店切二〉」とあり、『玉篇』心部には「念〈奴玷切思也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧中四には「念〈オモフ・シルス〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「愼」は見当たらないが『廣韻』去声三十三・線には「愼〈思愼〉」には見られる。『玉篇』心部には「愼〈乃叶切愛也又暗声憶也又音線〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中八八には「愼〈オモフ・ヲシム・ヤスシ・メクム〉」のように漢字と和訓が見られる。

②

82 亡^{ナカレ} 心^ニ 忘^{ワスル}

〔心(こころ)に忘(わする)亡(なかれ)〕

『説文解字』には「亡〈逃也从入从匕凡亡之屬皆从亡〉」とあり、『玉篇』亡部には「亡〈武方切死也去也逃也無也作亡同〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下四一に

心

廣^{ヒロ}懣<sup>イサムナリ
タケシ</sup>

〔心(こころ)廣(ひろく)懣(いさむ)なり〕

は「亡(音聖) ナシ・ホロフ・ナイカシロ・ニク・ウス・シヌ・ウスシ」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「忘(不識也从心亡声)」とあり、『玉篇』心部には「忘(無方切不憶也説文曰不識也又無放切)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七十には「忘(ワスル・スツ・イルカセ・マウ・又去乱 ノソム)」のように漢字と和訓が見られる。

『説文解字』には「懣(闊也一曰廣也大也一曰寛也从心从廣廣亦声)」とあり、『玉篇』心部には「懣(口朗苦謗二切大也寛也)」と続けて「懣同上」のようである。本文の「懣」と同じである「懣」という漢字が『説文解字』と『玉篇』には見られる。しかし、観智院本『類聚名義抄』には「懣」と「懣」という漢字が見当たらない。又、『説文解字』には「廣也」・・・「寛也」がある。従つて、「廣」と「寛」という漢字を調べる。先ず、『説文解字』には「廣(殿之大屋也从广黄声)」とあり、『玉篇』广部には「廣(古晃切大也又古曠切)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下九九には「廣(今正古日光反 ヒロシ・ヒロム・ホトコス・和音火ウ)」とあるように和訓が見られる。又、『説文解字』には「寛(屋寛大也从宀覯声)」とあり、『玉篇』宀部には「寛(苦完切緩也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下五四には「寛(古官反 ヒロシ・トロ(ホ)シ・トモカラ・ナタム・ユルス・モト・ユタカナリ・アイス)」続けて「寛上俗下正」のように漢字と和訓が見られる。観智院本『類聚名義抄』には「廣」「寛」という和訓は一致する。

④

522

心^{ココロ}是^{コレ}悞^{イフカシ}

〔心(こころ)是(これ)悞(いぶかし)〕

『説文解字』には「是(直也从日正凡是之属皆从是)」とあり、『玉篇』是部には「是(時紙切是非也説文曰直也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中九五には「是(音氏 コレ・ココニ・カカルコト・ヨシ・コトハル・スナハチ・ナホシ・カクノコトク・タツ)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「悞」という漢字は見当たらない。『大漢和辞典』には「悞(承紙切審也諦也)」とある。続けて心部には「悞(承紙切審也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中一〇一には「悞(アキラカ・ツツム・カキル)」とあり、本文の「悞(いぶかし)」と意味が逆に見られる。又、『玉篇』の「審」は、観智院本『類聚名義抄』法下四八には「審(アキラカナリ・サトル・ツハラヒラカナリ・チラス・ヒロシ・オモフ・ミル・ヨトミ・ハカリコト 和音シム)」のように和訓「悞(いぶかし)」が見当たらないが、続けて「不審 イフカシ」「未審同」のように二文字で和訓が見られる。

⑤

524

心

莫^{ナシ}悞^{ツトムルコト}

〔心(こころ)悞(つとむる)こと莫(なし)〕

『説文解字』には「莫(日且冥也从日在𠂔中)」とあり、『玉篇』には見当たらない。観智院本『類聚名義抄』僧上二には「莫(無各反 マナ・ナシ・ナカレ・サタマル・ウスシ・シツカナリ 和音マク)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「悞(勉也、从心莫声)」とあり、『玉篇』心部には「悞(莫固切爾雅曰懋懋悞勉也)」のように漢字は見られる。観智院

本『類聚名義抄』法中八九には「慄（音慕勉 イタハル・ツトム・ハコ）」のように漢字と和訓が見られる。

⑥

525

慄 クチキキ
心 ココロ
曲 マカルハ

〔慄（くちきき）心（こころ）曲（まかる）は〕

『説文解字』には「曲（象器曲受物之形或説曲蠶薄也凡曲之属皆从曲）」とあり、『玉篇』曲部には「曲（丘玉切枉也章也不直也）」のように漢字が見られる。観智院本『類聚名義抄』僧下一二五には「曲（マカル・メクル・クマ・マク・イル・ツフサニ・ツマヒラカニ・クハシ）」のように漢字と和訓が見られる。また、『説文解字』には「慄」という漢字は見当たらない。『大漢和辞典』には「慄 キョウ」は恐に同じとある。『玉篇』心部には「慄（去勇切疑也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九六には「慄（イササカニ）」という漢字と和訓は見られるが相応しくない。

⑦

528

心
去 サレ
怯 ツタナキヲ

〔心（こころ）の怯（つたなき）を去（され）〕

『説文解字』には「去（人相違也从大口声凡去之属皆从去）」とあり、『玉篇』去部には「去（羌據切除也違也行也又丘與切）」のように漢字が見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上八四には「去（今人合字 丘據反又上 サル・イヌル・マカル・マカス・ヲサム・ヤル・ミタシネ・スツ・ツカハス・イマシヌ・オハシヌ・サケ・マク・トヲシ・ウス・シヌ・シリソク・モテ イテ 和音コ）」のように漢字と和訓が見られる。又、『康熙字典』には「怯（本作怯）」とあり、『説文解字』には「怯（多畏也从犬去声）」と「怯（杜林説怯从心）」とあり、『玉篇』心部

には「怯（去切切懼也畏也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七九には「怯（區切反　オソル・ハハカル・ツタナシ・ヤハラカナリ・オチナシ・オロカナリ・ワツカニ・ヨハシ・和音カフ）」のように漢字と和訓が見られる。

⑧

530

修タノム心ココロ多ヨラシ

〔修（たのむ）心（こころ）多（ををし）〕

『説文解字』には「多（重也从重タ夕者相繹也故為多重タ為多重日為疊凡多之属皆从多）」とあり、『玉篇』多部には「多（旦何切衆也重也大有也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下一三五には「多（得河反　オホシ・オホウハ・ソコハク・マサル　和音タ）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「修」という漢字は見当たらない。『玉篇』心部には「修（尺紙切怙恃也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九五には「修（音是　タノム　時移反　怙恃也　シツカナリ　又云　俗修字　奴可反從巾）」のように漢字と和訓が見られる。

⑨

535

心ニ兼カネテ慊ウラミミテストモ

〔心（こころ）に兼（かねて）慊（うらみみてす）とも〕

『説文解字』には「兼（并也从又持秝兼持二禾秉持一禾）」とあり、『玉篇』秝部には「兼（古甜切并也両也説文云兼持二禾秉持一禾）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二八には「兼（カネテ・トモ　和音ケム）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「慊（疑也从心兼声）」とあり、『玉篇』心部には「慊（口玷切切齒恨也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九四には「慊（下兼反　ウタカフ・キラフ・

⑩

536

心^{ムネ} 心^{ココロニテ}
忪^{ウレウベシ}

カカシムヘシ

〔心(むね)心(こころ)にて忪(うれう)べし〕

ソネム・嫌二正 ウラム・ネカフ・・・とあり、観智院本『類聚名義抄』佛中一二には「嫌
 〈正嫌或胡兼反 キラフ・ウタカフ・ソネム・ニクム・恨・イタス・ウルハシ・和ケム〉」の
 ように漢字と和訓が見られる。「嫌」が正体である。

⑪

537

台^{ワカ} 心^{ニモ}
怠^{ヲコタレトモ}

〔台(わか)心(こころ)にも怠(をこたれ)とも〕

『説文解字』には「忪」という漢字は見当たらない。『玉篇』心部には「忪(七鳩切忪也)」の
 ように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』には「忪」という漢字は見当たらない。代り
 に『玉篇』心部には「惻(楚力切悲也痛也)」とあり、『説文解字』には「惻(痛也从心則声)」
 のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九八には「惻(音測 イタム・ネタ
 ム・イタハラシム・イマシム・タシナム・カクル 悲 憂 懼)」のように和訓としての漢字
 「憂 ウレウ」が見られる。又、本文の「心(ムネ)」も調べる。観智院本『類聚名義抄』法中
 六八には「心(音深 ココロ・ナカヒタ・ナサケ・ムネ・ナカコ)」のように漢字と和訓が見
 られる。

『説文解字』には「台(説也从口呂声)」とあり、『玉篇』口部には「台(與時切我也又音胎)」
 のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中四七には「台(ワレ・トシ・ヤシナフ
 ・シタカフ 又音胎)」のように漢字と和訓が見られる。そして観智院本『類聚名義抄』の「ワ
 レ」は代名詞自称に対して、本文の「ワカ」は代名詞対称である。又、『説文解字』には「怠

〈慢也从心台声〉とあり、『玉篇』心部には「怠〈徒改切懈怠也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七九には「怠〈音殆 オコタル・ユルス・ユルナリ・ハナル・タノム 和音平〉」のように漢字と和訓が見られる。

⑫

539 其^ソ心^{ココロ}

〔其(その)心(こころ)を基(をしえて)〕

『説文解字』には「其」という漢字は見当たらない。『玉篇』丌部には「其〈巨之切辭也事也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二五には「其〈今 ソレ・アニ・ナソ・トフラフ 和音コウ〉」のように漢字と和訓が見られる。そして観智院本『類聚名義抄』の「ソレ」は代名詞他称に対して、本文の「ソノ」は連語(中称の代名詞「そ」に格助詞「の」の付いたもの。近代語では「そ」の単独用法がないので、一語とみて「連体詞」とする)論がある。又、『説文解字』には「基〈毒也从心其声周書曰來就基基〉」とあり、『玉篇』心部には「基〈渠記切教也説文云毒也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七一には「基〈已其二正其又其記起渠二反 コロス・ヨセ・ヨシム〉」のように漢字のみ見られる。

⑬

541 疑^{ウタカフ}心^{ココロ}

〔疑(うたかう)は心(こころ)の懸(やまひと)り〕

『説文解字』には「疑〈惑也从子止匕矢声〉」とあり、『玉篇』子部には「疑〈魚其切嫌也恐也 不定也亦作疑〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧下一〇〇には「疑〈語其反 ウタカヒ・ウタカフ・ニタリ・シツカニ・タタク・ネヤ 和音ギ(濁音の表記である)〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「疑〈駭也从心疑疑亦声〉」とあり、

⑭

543

依^{ヨツテ}心^ニ慙^{ナゲキアリ}

『玉篇』心部には「慙（牛力切有所識也又五漑切）」とあり、又「慙（五代切惶也病也駭也）のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九〇には「慙（俗癡字）」と「慙慙音礙病駭」のように漢字のみ見られる。

〔心（こころ）に依（よつて）慙（なげき）あり〕

『説文解字』には「依（倚也从人衣声）」とあり、『玉篇』人部には「依（於祈切怙也助也説文云倚也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上二八には「依（音衣 イ・ヨル・ヲサフ・イタム・タヨリ・タスル・タスク・ナンソ・タトヒ・ホノカナリ・ウツクシウ・タノム）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「慙（痛声也从心依声孝經曰哭不慙）」とあり、『玉篇』心部には「慙（衣豈切痛声也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中九六には「慙（徭二於豈反 イタム・アハレフ・カナシム・ナケク）」のように漢字と和訓が見られる。

⑮

544

對^{タイシテ}心^ニ懟^{ウラミヨ}

〔心（こころ）に對（たい）して懟（うらみ）よ〕

『説文解字』には「對（或从士漢文帝以為責對而為言多非誠對故去其口以从士也）」とあり、『玉篇』𠂔部には「對（漢文帝以為責對而為言多非誠故去其口以從士）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下一四四には「對（都内反 トク・コタフ・ムカフ・タクヒ・カサヌ・衣 カタキ・アタル・オモフ・アフ 和音タイ）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「懟（怨也从心對声）」とあり、『玉篇』心部には「懟（直類切説文云怨也又徒對

切愚也」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中八二には「懟（アタム・ウラム・ウレフ・オロカナリ・・・）」のように漢字と和訓が見られる。

⑩

547

若^{ワカキ}心^{ココロ}惹^{ミタルルハ}

〔若（わかき）心（こころ）の惹（みたる）は〕

『説文解字』には「若（擇菜也从艸右手也一曰杜若香艸）」とあり、『玉篇』艸部には「若（如灼切杜若香草又如也汝也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二八には「若（可見 モシ・シク・カクノコトシ・シタカフ・ワカシ・ニタリ・ヨシ・タスク・ナムト・コトシ）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「惹（亂也从心若声人者切）」とあり、『玉篇』心部には「惛惹（而灼切亂也）」又、「惹（人者切亂也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七九には「惛俗若字」と「惹（如灼 如耶二反又人者反 コタフ・ミタル・ナヤマス）」のように漢字と和訓が見られる。

⑪

552

連^{シキリニ}心^ノ慙^{ナミタナカル}

〔連（しきり）に心（こころ）の慙（なみたなかる）〕

『説文解字』には「連（員連也从辵从車）」とあり、『玉篇』辵部には「連（力錢切合也及也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上五六には「連（ツラヌ・ツラナル・トモカラ・アフ・シキリ・ツク・オヨフ・トフ・シク・メクラス・マカル）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「慙（泣下也从心連声易曰泣涕慙如）」とあり、『玉篇』心部には「慙（力延切泣血也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』には「慙」という漢字表記は見当たらない。

⑮

554

公^{キミカ}心^{ココロ}松^{ウツシノ}

〔公(きみ)か心(こころ)松(うこかす)〕

『説文解字』には「公〈平分也从八从ム〉」とあり、『玉篇』八部には「公〈古紅切方平也正也通也居也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二七には「公〈音エキミ・オホヤケ・ツカウマツル・コト・アラハス・トモ〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「松」という漢字表記は見当たらない。『玉篇』心部には「松〈驚也〉」とあり、『集韻』には「松〈心動也〉」のように漢字は見られる。因みに『集韻』の「松〈心動也〉」は和訓と同じになる松(うこかす)のように義注が現れた。観智院本『類聚名義抄』法中七九には「松〈音鐘心―惶遽〉」と「忪〈音聡 イソカハシ・タタス・速・イソク・ヤスシ・…〉」のように漢字は見られる。

⑯

555

各^{ヲノヲノ}心^ヲ恪^{ツツシンテ}

〔各(をのをの)心(こころ)を恪(つつしんで)〕

『説文解字』には「各〈異辭也从口夂夂者有行而止之不相聽也〉」とあり、『玉篇』口部には「各〈柯洛切説文云異辭也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中五八には「各〈音閣 オノオノ・ツクス〉」続けて「各― ヲノヲノ」のように漢字と和訓が見られる。又、『康熙字典』には「恪〈本作憲〉」とあり、『説文解字』には「憲〈敬也从心客声春秋傳曰以陳備三憲〉」とあり、『玉篇』心部には「恪〈口各切敬也〉」と「憲〈説文同上〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七五には「恪〈若名反 ウヤマフ・ツトム・タタス・ツツシム・憲正急俗字〉」のように漢字と和訓が見られる。「憲」正体であり、「急」俗字であ

る。

②〇

562

心 ココロ

可 ベシ

何 ヲモシロル

〔心(こころ)何(をもしろ)可(べし)〕

『説文解字』には「可(𠂔也。从口。𠂔亦声。凡可之属皆从可)」とあり、『玉篇』可部には「可(𠂔我反。我切肯也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上七六には「可(𠂔我反。ヘシ・ムヘナフ・アヘテ・ハカル・ハカリ・ナラシ・アニ・シカルヲ・ヨロコフ・キク・ヨシ・ユルス・セム・ヒサシ・タヘタリ・ヤム・オナヘリ・又 カナヘリ 和音力)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』と『玉篇』には「何」という漢字は見当たらない。観智院本『類聚名義抄』法中一〇〇には「何(オモシロシ)」のように漢字と和訓が見られる。

図の凡例

○説文解字・玉篇に漢字が見られる

×説文解字・玉篇に漢字が見当たらない

○類聚名義抄に漢字と和訓が見られる

△類聚名義抄に漢字のみ見られる

×類聚名義抄に漢字が見当たらない

備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字	備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字
憂	×	○	×	⑩忛		○	○	○	①念
	○	○	○	⑩惻		○	○	×	①愔
	○	○	○	⑪台		×	○	○	②亾
	○	○	○	⑪怠		○	×	×	②亡
	○	○	×	⑫其		○	○	○	②忘
	△	○	○	⑫基		×	○	○	③慙
	○	○	○	⑬疑		×	○	×	③愼
	△	○	○	⑬擬		○	○	○	③廣
	○	○	○	⑭依		○	○	○	③寬
	○	○	○	⑭悠		○	○	○	④是
	○	○	○	⑮對		○	○	×	④悝
	○	○	○	⑮懟		×	○	○	④諛
	○	○	○	⑯若	不審	○	○	×	④審
	○	○	○	⑯惹		○	×	○	⑤莫
	○	○	○	⑰連		○	○	○	⑤悞
	×	○	○	⑰憑		○	○	○	⑥曲
	○	○	○	⑱公		△	×	×	⑥恤
	△	×	×	⑱忿		×	○	×	⑥患
	△	○	×	⑱松		○	○	○	⑦去
	○	○	○	⑲各		○	○	○	⑦怯
	○	○	×	⑲恪		×	×	○	⑦狹
窓	○	○	○	⑲窓		○	○	○	⑧多
	○	○	○	⑳可		○	○	×	⑧侈
	○	×	×	㉑何		○	○	○	⑨兼
合計49	41	43	35		嫌	○	○	○	⑨慊

I. 心部20句の図

Ⅱ、「人部」7句

①

35 我^{ワレモ} 人^モ 俄^{ニハカニ}

〔我(われ)も人(ひと)も俄(にはかに)〕

『説文解字』には「我〈施身自謂也或説我頃頓也从戈从才或説古垂字一曰古殺字凡我之属皆从我〉」とあり、『玉篇』我部には「我〈五可切説文云施身自謂也易曰我有好爵〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧中四二には「我〈可 反 ワレ・イタツキ・カタヅ〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「俄〈頃也从俄人我声詩曰仄弁之俄〉」とあり、『玉篇』人部には「俄〈我多切俄頃須臾也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上一五には「俄〈音義 ニハカニ・シハラク・スミヤカニ・カタフク・タチマチ・ツラヌ・シハラクアリテ・ナナメナリ・ノフ・アタフ〉」のように漢字と和訓が見られる。

②

423 俚^{タノミ} 人^ハ 里^{サトラ}

〔人(ひと)は里(さと)を俚(たのみ)〕

『説文解字』には「里〈居也从田从土凡里之属皆从里〉」とあり、『玉篇』里部には「里〈力擬切邑里也周禮曰五鄰為里国語曰管仲制国五家為軌十軌為里〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中一一〇には「里〈音理 サト・ヨリ・キル・コトハル・イヤシ〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「俚〈頼也从人里声〉」とあり、『玉篇』人部には「俚〈良子切頼也説文云聊也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上三三には「俚〈音里 イヤシ〉」のように漢字のみ見られる。因みに『説文解字』の「俚〈頼也从人里声〉」の中で「頼」は和訓と同じになる俚(たのみ)のように義注が現れた。観

③

426

人^ハ足^{アシ}促^{スミヤカナリ}

智院本『類聚名義抄』には「俚（音里 イヤシ）」しかないのに、「弘法字尽」の俚（たのみ）は、もし『説文解字』から出て来たかも知れません。

〔人（ひと）は足（あし）促（すみやか）なり〕

『説文解字』には「足（人之足也在下从止口凡足之属皆从足）」とあり、『玉篇』足部には「足（子欲切説文云人之足也在體下从止口易云震為足）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上七三には「足（アシ・フモト・ユク・アク・ユタカナリ・タンヌ・トトム・エタリ・マサル・ミホ・ナル・アキタル・タル）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「促（迫也从人足声）」とあり、『玉篇』人部には「促（且足切速也迫也）」とあり、『広韻』には「促（速也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上二九には「促（且足反 モヨラス・ウナカス・チカツク・スミヤカナリ・チカシ・ツツマル・ミシカシ・セマル・セメトル）」のように漢字と和訓が見られる。

④

519

人^ミ間^{ケン}倂^{ユタカナレハ}

〔人間（にんけん）倂（ゆたか）なれは〕

『説文解字』には「間（隙也从門从月）」とあり、『玉篇』門部には「間（居閑切隙也又居覓切迭也又音閑）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下七六には「間（ハシタ・ミテル・ヒマ・シハラク・コノコロ・ウカカフ・サカフ・タカヒニ・ヒソカニ・アヒタマ・ママニ・イフ・アツカル・マシナフ・イユ・マシハル・シツカニ・フサク・ヘタツ・ヒマ・アヒタム・ハサマル・ソシル・カサル・アヒタ・マ・ママニ・和音ケン）」のように漢字と和訓

⑤

534

𦣻^{ウカカヘ}
二

人^ノ

見^{ミンコトラ}
一

〔人(ひと)の見(みんこと)を𦣻(うかかへ)〕

が見られる。しかし、続けて「間俗字」と「人間 ヨノナカ」のように本文と同じ二文字の漢字語なのに和訓は一致しない。間は俗字で、本来は間と書く。又、『説文解字』には「𠂔(武兒从人間声詩曰瑟兮𠂔兮)」とあり、『玉篇』人部には「𠂔(丁板切武兒詩云瑟兮𠂔兮𠂔寛大也又音簡)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上二八には「𠂔(限音又祐限反 エラフ・タケシ・ヲホキナリ)」のように漢字のみ見られる。

⑥

538

𦣻^{ニシム}
二

人^ノ

惡^{アシキヲ}
一

〔人(ひと)の惡(あしき)を𦣻(にくむ)〕

『説文解字』には「見(視也从儿从目凡見之属皆从見)」とあり、『玉篇』見部には「見(吉薦切視也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中八一には「見(居薦反 ミル・ミユ・マミユ・シメス・イマ・エラム・ワレ・イチシルシセラル・アラハス・サトル・アラハル・和音ケム)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「𦣻(譬諭也一曰間見从人从見詩曰𦣻天之妹)」とあり、『玉篇』人部には「𦣻(苦見切詩曰𦣻天之妹𦣻聲也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上三〇には「𦣻(苦見反又下顛反 ウカカフ・タトフ・コト・クマス)」のように漢字と和訓が見られる。

『説文解字』には「惡(過也从心𠂔声)」とあり、『玉篇』心部には「惡(於各切不善也又烏路切憎惡也)」とあり、続けて「惡同上俗」とあるように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中七五には「惡(於各反 アシ・ナンソ・カタチ・ミニクシ・イカムソ・ハチ・マウク

昔^{ムカシ}人^ヲ借^{ヲシメ}

・ニクム・ニクミス・ミヌクシ・イツクソ・和音アク」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』と『玉篇』には「𪛗」という漢字は見当たらない。『康熙字典』には「𪛗〈集韻俗悪字〉」とある。観智院本『類聚名義抄』佛上七には「𪛗〈詭字・・・ニクシ〉」のように漢字と和訓が見られる。「𪛗」正体であり、「𪛗」俗体である。又、『龍龕手鏡』人部入声には「𪛗𪛗〈二俗烏各烏故二反正作惡字〉」とある。

〔昔(むかし)の人(ひと)を借(をしめ)〕

『説文解字』には「昔(乾肉也从残肉日以晞之與俎同意)」とあり、『玉篇』日部には「昔(思亦切往也久也昨也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中八五には「昔(音惜 始 ムカシ・イニシヘ・ヨル・サカル)」のように漢字と和訓が見られる。『説文解字』には「借(假也从人昔声)」とあり、『玉篇』人部には「借(子亦切假借也又子夜切)」のように漢字は見られる。智院本『類聚名義抄』佛上二〇には「借(子亦子夜反 カル・カス・トフ・タトヒ・ムカシ・カクス・和昔ク)」のように漢字のみ見られる。

備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字	備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字
	○	○	○	⑤見		○	○	○	①我
	○	○	○	⑤倪		○	○	○	①俄
	○	○	○	⑥惡		○	○	○	②里
	○	×	×	⑥僂		△	○	○	②俚
	○	○	○	⑦昔		○	○	○	③足
	△	○	○	⑦借		○	○	○	③促
						○	○	○	④閒
合計14	14	13	13			△	○	○	④僞

Ⅱ. 人部7句の図

備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字	備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字
	○	○	○	⑤正		○	○	○	①咎
	○	○	○	⑤証		×	○	×	①謬
	○	○	○	⑥敬		△	○	○	①偁
	○	○	○	⑥警		○	○	○	②告
	○	×	○	⑦每		△	○	○	②誥
	○	○	○	⑦誨		○	○	○	③若
						○	○	○	③諾
						○	○	○	④兼
合計15	14	14	14			○	○	○	④謙

Ⅲ. 言部7句の図

Ⅲ、【言部】 7句

①

523

謔^{ソシル}

咎^{トガラ}

言^{ワレハ}

〔咎（とが）を言（われ）は謔（そしる）〕

『説文解字』には「咎（災也从人从各各者相違也）」とあり、『玉篇』人部には「咎（其久切説文云災也从人从各各有相違也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中五八には「咎（音舅 惡 ト力 遇病・ワサハヒ・アヤマチ・トカム 又音高 和音ク）」のように漢字と和訓が見られる。『大漢和辞典』には俗に同じである。『康熙字典』には「謔（毀也又人名）」と「集韻同俗」とあり、又、「俗（集韻巨九切音曰毀也）」とある。『説文解字』には「謔」という漢字は見当たらない。したがって、『説文解字』には「俗（毀也从人咎声）」とあり、『玉篇』人部には「俗（公勞渠久二切毀也）」とあり、言部には「謔（巨久切毀也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』には「謔」という漢字は見当たらない。したがって、観智院本『類聚名義抄』佛上二一には「俗（高上 太・・・）」のように漢字のみ見られる。又、観智院本『類聚名義抄』法上四七には「言（ワレ・ココニ・イフ・コト・コトハ・トク・・・）」のように漢字と和訓が見られる。

②

526

告^{マウス}

言^{コトハモ}

誥^{ヒツム}

〔告（まうす）言（ことは）も誥（ひつむ）〕

『説文解字』には「告（牛觸人角箸横木所以告人也从口从牛易曰僮牛之告凡告之属皆从告）」とあり、『玉篇』告部には「告（公号切語也請告也説文曰牛觸人角箸横木所以告人也又公篤切易曰初筮告）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中六一には「告（ツク・

③

529 若^{コトクニ}
言^{イハ} 諾^{コトウレハ}

〔言(いう)若(ことく)に諾(こたう)れば〕

カタラフ・ツタフ・マウス・ノタマフ・ヲシフ・ウク・ヤスム・イトマ」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「誥(告也从言告声)」とあり、『玉篇』言部には「誥(古到切爾雅云誥告也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上四九には「誥(古到反 ツク・カムカフ・ツツシム・ツカフ・アラハス・謹・語)」のように漢字のみ見られる。

④

531 謙^{キラウトハ}
兼^{カネテノ} 言^{コトハ}

〔謙(きらう)とは兼(かねて)の言(こと)は〕

『説文解字』には「若(擇菜也从艸右手也一曰杜若香艸)」とあり、『玉篇』艸部には「若(如灼切杜若香草又如也汝也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二八には「若(可^レ見 モシ・シク・カクノコトシ・シタカフ・ワカシ・ニタリ・ヨシ・タスク・ナムト・コトシ)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「諾(應也从言若声)」とあり、『康熙字典』には「諾(説文應也)」又、『玉篇答也』のように漢字は見られる。『大漢和辞典』には應の本字。『玉篇』言部には「諾(那各切答也説文曰應也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上五一には「諾(奴各反 ムヘナフ・シタカフ・コタフ・而・・・)」と「諾正」と「兼諾 ムヘナフ」のように漢字と和訓が見られる。

『説文解字』には「兼(并也从又持秝兼持二禾秉持一禾)」とあり、『玉篇』秝部には「兼(古甜切并也而也説文云兼持二禾秉持一禾)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二八には「兼(カネテ・トモ 和音ケム)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文

⑤

550

正マサシク言コトハ証イツハル

解字』には「謙（敬也从言兼声）」とあり、『玉篇』言部には「謙（苦嫌切輕也讓也敬也）」とあり、『康熙字典』には「謙（與嫌同）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上五七には「謙（去嫌反 ヘル・ユツル・ウヤマフ・ウタカフ・キラフ 和ケム）」のように漢字と和訓が見られる。

〔正（まさしく）言（ことは）証（いつはる）〕

『説文解字』には「正（是也从止一以止凡正之属皆从正）」とあり、『玉篇』正部には「正（之盛切長也定是也又音征）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上九八には「正（音政 タタス・カミ・ヤム・トトム・マツリコト・マサシ・タタシ・シハラク・又音征）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「証（諫也从言正声）」とあり、『玉篇』言部には「証（之盛切諫也）」と「諫（柯鴈切正也間也更也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上五九には「証（音政 イツハル・イサム）」のように漢字と和訓が見られる。

⑥

551

敬ウヤマヒ言コトハニハ警ツツシメトモ

〔言（ことは）には敬（うやまひ）警（つつしめ）とも〕

『説文解字』には「敬（肅也从支苟）」とあり、『玉篇』苟部には「敬（居慶切恭也慎也肅也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧中六〇には「敬（音竟 ウヤマフ・ツツシム・オカム・ツトム・ハチ・タカシ・ウヤ）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「警（言之戒也从言敬敬亦声）」とあり、『玉篇』言部には「警（居影切戒也敕也）」

のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上六四には「警（音景 ススム・起・衆メツラシ・ナイカシロ・ツツシム・カタシ・イマシム・オコカス・オトロカス）」のように漢字と和訓が見られる。

⑦

556

誨^{ヲシヘヨ}毎^{ツネニ}言^イ

〔毎（つね）に言（いい）誨（をしへよ）〕

『説文解字』には「毎（艸盛上出也从巾母声）」とあり、『玉篇』には「毎」という漢字は見当たらない。観智院本『類聚名義抄』僧下一二四には「毎（ツネニ・ムサホル）」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「誨（曉教也从言每声）」とあり、『玉篇』言部には「誨（呼續切教示也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上七二には「誨（音悔 クエ・ヲシフ 諫・・・和音 クエ）」のように漢字と和訓が見られる。

IV、【その他部】10句

①

545 不^スレ ヒトツナラ 一 ヲホイナリ 丕

「一(ひとつ)なら不(す)丕(をほい)なり」

『説文解字』には「不(鳥飛上翔不下來也从一一猶天也象形凡不之属皆从不)」とあり、『玉篇』不部には「不(甫負府牛二切鳥飛上翔不下來也又弗也詞也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上七七には「不(今正甫浮反又方久久反弗 セス・イナ・ナシ・アラス・アラスヤ・和音ブ)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「丕(大也从一不声)」とあり、『玉篇』一部には「丕(普邳切虞書曰嘉乃丕嘉乃績孔安國曰丕大也或作𠂔)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上七七には「𠂔(普坻反 多 ヲホイナリ)」のように漢字と和訓が見られる。

②

521 三 佛^{フツハ} 佛^{マコトナレトモ}

「三 佛(ふつ)は佛(まこと)なれとも」

『説文解字』には「佛(見不審也从人弗声)」とあり、『玉篇』人部には「佛(孚勿切仿佛也又符弗切又音弼)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上一には「佛(音費 ホノカナリ・又符フ弗フツ反 ホトケ・ヲホキニス・ヲホキナリ・タチマチ・又音弼 ヒチ・タスク・和音部^{マコト})」のように漢字と和訓が見られる。しかし、『説文解字』と『玉篇』には「佛」という漢字は見当たらない。又、観智院本『類聚名義抄』にも「佛」という漢字は見当たらない。

③

546

十^{トラ}専^{シケバ}博^{ヒロシ}

〔十(とを)専(しけば)博(ひろし)〕

『説文解字』には「専(布也从寸甫声)」とあり、『玉篇』寸部には「専(撫俱切徧也布也或作敷)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下一四三には「専(之縁反・モハラ・ホシイママニ・ヒトリ・タウメ・タカシ・和音セン)」のように漢字のみ見られる。又、『説文解字』には「博(大通也从十専、専布也亦声)」とあり、『玉篇』十部には「博(布各切廣也通也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上八二には「博(神俗反 ヒロシ・カフ)」のように漢字と和訓が見られる。

④

561

夫^{ソレ}口^{クチニ}呋^{ワラウハ}

〔夫(それ)口(くち)に呋(わらう)は〕

『説文解字』には「夫(丈夫也从大一以象簪也周制以八寸為尺十尺為丈人長八尺故曰丈夫凡夫之属皆从夫)」とあり、『玉篇』夫部には「夫(甫俱切説文云丈夫从一大一以象簪周制八寸為尺十尺為丈人長八尺故曰丈夫又夫三為屋一家田為一夫也又音扶語助也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末三五には「夫(音扶・ソレ・カノ・カレ・ヲフト・ヲトコ・イヤシ・モツ・ツカフ・マスラフ・ヒトヒト)」のように漢字と和訓が見られる。しかし、『説文解字』と『玉篇』には「呋」という漢字は見当たらない。『大漢和辞典』には呋に同じである。観智院本『類聚名義抄』佛中三一には「呋(俗夫字甫夫反 又扶音)」と「呋呋(二俗呋字)」とあり、法上七六には「呋(音決馬行兒 トシ・ハシル)」のように漢字のみ見られる。

⑤

553

明^{ミナモト}月^{ツキ}目^メ

〔月(つき)を目(め)に明(みて)も〕

『説文解字』には「月〈闕也大陰之精象形凡月之属皆从月〉」とあり、『玉篇』肉部には「肉〈如六切骨肉也説文云𩚑肉也象形〉」続けて「月同上」とあり、又、月部には「月〈魚厥切太陰之精也夜見光謂之月月御謂之望舒〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中一三七には「月〈魚厥反・ツキ・ヨル・カクル・正月等・在余抄〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「明」という漢字は見当たらない。『玉篇』目部には「明〈莫兵切視也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中七七には「明〈ミル・ミテリ・アキラカナリ〉」のように漢字と和訓が見られる。又、観智院本『類聚名義抄』佛中一三七には「明明明〈上通中古 下正 音鳴 アキラカナリ・アクルニ・アス〉」のように漢字のみ見られる。

⑥

533

示^{シメス}必^{カナラス}祕^{ヒソカニセヨ}

〔示(しめす)こと必(かならす)祕(ひそか)にせよ〕

『説文解字』には「必〈分極也从八弋弋亦声〉」とあり、『玉篇』八部には「必〈俚吉切極也果也然也敕也專也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二九には「必〈カナラス・モシ・トク・カナフ・ナラフ・アキラカナリ・和音ヒチ〉」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「祕〈神也从示必声〉」とあり、『玉篇』示部には「祕〈悲冀切説文云神也廣雅曰勞也蜜也藏也〉」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下七には「祕〈彼媚反 キヒシ 和ヒ〉」と「祕誓〈蒲蔑反〉」とあり、法下一〇には「秘〈俗通

秘正ナヒタリ・キヒシ 筆媚反 ヒソカニ・カクス・チカシ・ナヒヤカ 和ヒ」のように漢字と和訓が見られる。

⑦

560 腓^{アフラハ} 非^{アラス} 肉^{ニクニ}

〔腓(あぶら)は肉(にく)に非(あらす)〕

『大漢和辞典』にはこむら。ふくらはぎ。脛の背面のふくれているところ。『説文解字』には「非(違也从飛下翬取其相背凡非之属皆从非)」とあり、『玉篇』非部には「非(方違切不是也下也隠也責也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧下八六には「非(甫肥反ウラナフ・トカ・クマ・アラヌ・アラス・ソシル・ミル・アシ・和音ヒ)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「腓(脛腓也从肉非声)」とあり、『玉篇』肉部には「腓(抹非切脛腓也)」と「腓(時亮切腓腸也)」又、「脛(胡定切腓腸前骨也史記曰斬朝涉之脛)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛中一二四には「腓(音肥 サル・コムラ・コフシ・ヤム 病・變・痲字)」続けて「腓腸 ヨホロ」のように漢字のみ見られる。

⑧

343 𦨭^{フネハ} 兼^{カネテ} 舟^{フネ}

〔𦨭(ふね)は兼(かねて)の舟(ふね)〕

『説文解字』には「兼(并也从又持秝兼持二禾秉持一禾)」とあり、『玉篇』秝部には「兼(古甜切并也両也説文云兼持二禾秉持一禾)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下末二八には「兼(カネテ・トモ 和音ケム)」のように漢字と和訓が見られる。又、『大漢和辞典』にはふねの名である。『康熙字典』には「𦨭(五音集韻古念切兼去声舟名)」とあり、『説文解字』には「𦨭」という漢字は見当たらない。『玉篇』舟部には「𦨭(居念切舟)」のよ

⑨

558 ヒサホネニハ
𩑦

可 ベシ
骨 ホネアル

〔𩑦(ひさはね)には骨(ほね)ある可(べし)〕

うに漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』には「𩑦」という漢字は見当たらない。

『説文解字』には「可(𠄎)也从口𠄎亦声凡可之属皆从可」とあり、『玉篇』可部には「可(𠄎)我切肯也」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛上七六には「可(𠄎)我反

ヘシ・ムヘナフ・アヘテ・ハカル・ハカリ・ナラシ・アニ・シカルヲ・ヨロコフ・キク・ヨシ・ユルス・セム・ヒサシ・タヘタリ・ヤム・オナヘリ・又 カナヘリ 和音力」のように漢字と和訓が見られる。又、『大漢和辞典』にはひざほねである。『康熙字典』には「𩑦(玉篇腰骨也與𩑦𩑦同)とあり、『説文解字』には「𩑦」という漢字は見当たらない。『玉篇』骨部には「𩑦(𠄎)𠄎切𩑦骨」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本六には「𩑦(正膝阿 ヒサラ・カハラ 阿旦作)」のように漢字と和訓が見られる。

⑩

559 ハキハ
𩑦

交 マジハリ
骨 ホネニ

〔𩑦(はき)は骨(ほね)に交(まじはり)〕

『大漢和辞典』にははぎ。膝の下。又、脛の足に近く細いところ。あしくびである。『説文解字』には「交(脛也从大象交形凡交之属皆从交)」とあり、『玉篇』交部には「交(古肴切共也更也合也道也或作𩑦)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法下四三には「交(マシハル・マシハリ・コモコモ・ヨシヒ・カハルカハル・イカテ・ニハカ)」のように漢字と和訓が見られる。又、『説文解字』には「𩑦(脛也从骨交声)」とあり、『玉篇』骨部には「𩑦(苦交切脛也爾雅曰馬四𩑦皆白𩑦)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下

本六には「𨮒（𨮒二正苦交反 ハキ・ムカハキ）」とあり、又、法上八三には「𨮒（シリソク
或𨮒音敲 ハキ・アヤマツ）」のように漢字と和訓が見られる。

備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字	備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字
	○	○	○	⑥必		○	○	○	①不
	△	○	○	⑥祕		○	○	○	①丕
	○	×	×	⑥秘		○	○	○	②佛
	○	○	○	⑦非	不明	×	×	×	②𠂔
	△	○	○	⑦腓		○	○	○	③專
	○	○	○	⑧兼		○	○	○	③博
	×	○	×	⑧𦵏		○	○	○	④夫
	○	○	○	⑨可		△	×	×	④𠂔
	○	○	×	⑨𠂔		○	○	○	⑤月
	○	○	○	⑩交		△	○	×	⑤肉
	○	○	○	⑩𦵏		○	○	×	⑤明
合計22	20	19	15						

IV. その他部10句の図

第二節 梵舜本と弘法字尽のみある19句

①

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

110 𠂔^ニ 𠂔^レ口^ヲ 周^{アマネシ}

〔口を𠂔に周(あまねし)〕

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

98 𠂔^{ヲラテ} 吉^{ヨキラ}𠂔^レ 周^{メクル}

〔吉(よき)を𠂔(ををて)周(めくる)〕

『説文解字』には「周(密也从用口)」とあり、『玉篇』口部には「周(諸由切説文云密也論語云雖有周親)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧下一〇五には「周(音州 アマネク・クマ・マコトニ・チカシ・メクル・タタシ・スクフ・ヒソカニ・・・和音シウ)」と「周章 アハツ・サハク」のように漢字と和訓が見られる。

②

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

203 𣎵^{トカハ} 木^キ

母

〔𣎵(とか)は木(き)の母(はは)〕

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

189 𣎵^{トカハ} 木^キ母^{ハハ}

〔𣎵(とか)は木(き)の母(はは)〕

『日本国語大辞典』には①つが【𣎵】マツ科の常緑高木である。『書言字考節用集』六には「𣎵 ツガ」とあり、『和漢三才圖会』八二には「𣎵 とが・ツガ」「𣎵(倭字 関東曰豆賀(ツカ)、関西曰止賀)」とあり、『日本植物名彙』(松村任三)には「ツガ」とある。続けて②とが【𣎵】「つが(𣎵)」に同じである。『伊京集』には「𣎵 トガ」とあり、『大和本草』十二には「𣎵(トガ)葉はもみの如くにしてこまかなり(略)本邦に昔より、𣎵の字をとがとよむ」などがある。『大漢和辞典』には「𣎵」は国字。とが。つが。常緑喬木の一である。『和漢三才圖会』藝財には倭字、「𣎵(俗云止加似椶堅實也、木名俗字)」とあり、観智院本『類聚名義抄』佛下本八三には「𣎵(俗又俗𣎵字音母)」

とある。又、佛下本三八には「拇（音母 オホオヨヒ）」とある。『高山寺資料叢書第七冊の明恵上人夢記』第九篇には「梅尾トガノヲ」などが見られる。『古本節用集六種研究並びに総合索引』の「明応五年本節用集（国立国会図書館蔵本、明応五年書写、伊勢本）」には「天地部・登・梅尾トガノヲ 茶の名所也」とあり、「天正十八年本節用集（東洋文庫蔵本、天正十八年刊本、伊勢本）」には「登・天地・梅尾トガノヲ 名所」とあり、「饅頭屋本節用集（東京教育大学附属図書館蔵本、室町末期刊本、伊勢本）」には「土・天地・梅尾トガノヲ」とあり、「黒本本節用集（前田家育徳財団尊經閣文庫蔵本、室町末期写本、印度本）」には「登 天地 梅尾トガノヲ 人名 梅尾トガノヲ」とあり、「易林本節用集（内閣文庫蔵本、慶長二年刊本、乾本）」には「登・乾坤・梅尾トガノヲ 茶之名所」とあり、「伊京集（国立国会図書館蔵本、室町時代書写、伊勢本）」には「言語進退・登・梅尾トガノヲ」などがある。

③

3 慶長二十年梵舜写本（梵舜本）

5 貞享頃刊弘法字尽（貞享版）

204 ^{スモハ} 李 木 子 （李（すもも）は木（き）の子（こ））

190 ^{スモハ} 李 木 子 （李（すもも）は木（き）の子（こ））

『大漢和辞典』には「李」木の名。すももである。『説文解字』には「李（李果也从木子声）」とあり、『玉篇』木部には「李（力子切果名又左氏傳云行李）」のあるように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本八七には「李（ツハキモモ 上音里 スモモ 非・皇姓・・・）」のように漢字と和訓が見られる。

④

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

205 木^ハ 可^レ 柯^{エタアル}
〔木(き)は柯(えた)ある可〕191 木^{キニハ} 可^{ベシ} 柯^{エタアル}
〔木(き)には柯(えた)ある可(べし)〕

『大漢和辞典』には「柯」、え。斧の柄である。『説文解字』には「柯(斧柄也从木可声)」とあり、『玉篇』木部には「柯(音哥枝也説文曰斧柄也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本二一九には「柯(音哥 エタ・カラ・ツカ・ヲノノエ・・)」のように漢字と和訓が見られる。

⑤

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

206 江^ハ 可^レ 水^{アル}
〔江は水ある可〕

『説文解字』には「江(江水出蜀湔氐徼外崦嵫山入海从水工声)」とあり、『玉篇』水部には「江(古雙切山海經云水出崦嵫山)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上一には「江(古雙反 エ・和音力アウ)」とある。梵舜本の場合漢字が都合悪い。

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

192 河^{カハニハ} 可^{ベシ} 水^{ミツ}
〔河(かは)には水(みつ)ある可(べし)〕

『説文解字』には「河(河水出焞煌塞外昆侖山發原注海从水可声)」とあり、『玉篇』水部には「河(戸柯切河出崦嵫山)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法上一には「河(音河 カハ 和音又力)」のように漢字と和訓が見られる。二文字として「天河 アマノカハ」と「漢河同」と「銀河同」などが見られる。この場合は漢字表記が異なり、梵舜本は「江」という漢字であり、弘法字尽は「河」という漢字が見れる。

⑥

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

207 草^ハ之^{コレ} 芝^{シハ}
〔草は之(これ)芝(しは)〕

193 艸^{クサハ}之^{コレ} 芝^{ミチシバ}
〔艸(くさ)は之(これ)芝(みちしば)〕

『説文解字』には「芝(艸也)从艸从之」とあり、『玉篇』艸部には「芝(孚劒切草浮出水兒)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧上二一には「芝(音之サハウト・又ム・又サク・アツマル・シハ……)」のように漢字と和訓が見られる。梵舜本より弘法字尽が正しく直してあることに気がつく。

⑦

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

208 竹^ハ尹^{コレ} 筭^{タカナ}
〔竹は尹(これ)筭(たかな)〕

194 竹^{タケハ}尹^{コレ} 筭^{タカナ}
〔竹(たけ)は尹(これ)筭(たかな)〕

『大漢和辞典』には「筭ジュン」又「筭」に同じである。『説文解字』には「筭(竹胎也从竹旬声)」とあり、『玉篇』竹部には「筭(先尹切竹萌江也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧上六一には「筭筭(上通下正音隼 タカムナ・ウツキヤ)」のように漢字と和訓が見られる。

⑧

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

211 木^モ同^シ 桐^{キリ}
〔木も同(し)桐(きり)〕

197 木^ハ同^{ヨナシク} 桐^{キリ}
〔木は同(しく)桐(きり)〕

『説文解字』には「桐(榮也从木同声)」とあり、『玉篇』木部には「桐(徒東切木名)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本九〇には「桐 音同——有四

種」とあり、「梟古」「青——シヤウト」「梧——上音吾」「壟——」「椅——上音倚
キ
リ 己上和音上 皆キリ 上又音椅 ウルシノキ・アシトル・手歟 アシトテヒク・カ
タシトテヒク」のように四種の漢字と和訓も見られる。

⑨

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

195	木 _キ	目 _メ	相 _{ソウ}
	木	目	相
			〔木(き)の目は相(あひ)〕

『説文解字』には「相(省視也从目从木易曰地可觀者莫可觀於木詩曰相鼠有皮)」とあ
り、『玉篇』目部には「相(先羊切又先鍾切詩云相彼鳥矣相視也)」のように漢字は見ら
れる。観智院本『類聚名義抄』佛中七六には「相(先高反 タスク・ミル・ツチシロ・
コモコモ・ミチヒク・アフ・タカヒニ・マサリカホ・マコト・キク・カタチ・又平 和
音サウ)」とあり、佛下本一一三には「相(アフ・ニル・ミル・カタチ・タカヒニ・ト
ヲシ・ハケム・トフラフ・イフ・ヲサム・ハカル・タカシ・マサ・スケ・ミチヒク・ツ
チシロ)」のように両部に漢字と和訓が見られる。

⑩

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

196	木 _キ	口 _コ	杏 _{カラモモ}
	木	口	杏
			〔木の口は杏(からもも)〕

『説文解字』には「杏(果也从木可省声)」とあり、『玉篇』木部には「杏(胡梗切果也)」
のように漢字は見られる。観智院『類聚名義抄』佛下本一〇八には「杏(音苻 カラモ
モ・アフ・サイハヒ)」と「杏子カラモモ」のように漢字と和訓が見られる。

⑪

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

214 草^ハ 云^レ 芸^{ミケル} [草は云(これ)芸(みたる)]198 艸^{クサハ} 云^レ 芸^{ミケル} [艸(くさ)は云(これ)芸(みたれくさ)]

『日本国語大辞典』にはみだれぐさ【乱草】植物「すすき(薄)」の異名である。『蔵玉集』には「堀川院(略)みたれ草薄」とあり、『重訂本草綱目啓蒙』九・山草には「芒すすき、みだれぐさ 古名」とあるように漢字と和訓が相応しくない。又、和訓として「ミタレ」は、観智院本『類聚名義抄』僧上七には「芒芒芒 中正 下俗・・・トカル・イソク・マトフ・オホフ・ミタル・ユタカニ・ヲカシ・トシ・シノネ」のように漢字と和訓が見られる。『説文解字』には「芒(艸耑从艸亾声)」とあり、『玉篇』艸部には「芸(艸也似目宿从艸云声淮南子説芸艸可以死復生)」とあり、『玉篇』艸部には「芸(古軍切香草也説文曰似目宿)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧上二四には「芸(音雲 クサノ香・クサキル・クサハラフ・モミチ)」のように漢字のみ見られる。

⑫

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

215 竹^ヲ 由^{ヨシアルハ} 笛^{フエ} [竹の由(よし)あるは笛(ふえ)]199 竹^{タケ} 由^{ヨシアルハ} 笛^{フエ} [竹(たけ)の由(よし)あるは笛(ふへ)]

『説文解字』には「笛(七孔笛也从竹由声羌笛三孔)」とあり、『玉篇』竹部には「笛(徒切七孔笛也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』僧上八〇には「笛

⑬

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

〔音敵 テキ・チャク・フエ〕のように漢字と和訓が見られる。

216 200

糸クロキハ 玄コトノヲ 絃

〔糸の玄(くろき)は絃(ことのを)〕

糸イト 玄イツクシキハ 絃コトノイト

〔糸(いと)の玄(いつくしき)は絃(ことのいと)〕

『大漢和辞典』には「絃ケン・ゲン」と。琴瑟などの糸。通じて弦に作る。「絃」という漢字は『説文解字』と『玉篇』には見当たらない。観智院本『類聚名義抄』法中一二〇には「絃(音弦 コトヲ・ユミツル)」のように漢字のみ見られる。又、『説文解字』には「弦(弓弦也从弓象絲軫之形凡弦之屬皆从弦)」とあり、『玉篇』弓部には「弦(奚堅切弓弦也)」のように漢字は見られる。又、観智院本『類聚名義抄』僧中二五には「弦(今正 ユミツル・ハル・音絃 ツル・ツルハク・ユミハリ 景・宿・類)」のように漢字のみ見られる。

⑭

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

217 201

榊カミ 木キハ 神サカキ

〔榊は木の神(かみ)〕

神カミ 木キハ 榊サカキ

〔神(かみ)(たつとき)の木(き)は榊(さかき)〕

『日本国語大辞典』にはさかき【榊】栄える木の意、常緑樹の総称。特に神事に用いる樹をさす場合が多い。『古事記』上には「天香山の五百(いほ)つ真(ま)賢木(さかき)を根許士爾許士(ねこじにこじ)て」とあり、『万葉集』三・三七九には「奥山の賢木(さかき)の枝に白香(しらか)つけ木綿(ゆふ)とりつけて(大伴坂上郎女)」とあり、『拾遺』神楽歌・六一〇には「近江なるいやたか山のさか木にて君がちよをばいのりかざさむ(平

兼盛」とあり、『源氏物語』葵には「齋宮の、また本の宮におはしませば、さかきのはばかりにことつけて」とあり、『今昔物語』一〇・三三には「或は榊(さかき)を取れる者、員(かず)不知ず多かり」とあり、『色葉字類抄』には「坂樹、サカキ 日本私記用之 榊 俗用之、賢木 同 本朝式用之」とあり、観智院本『類聚名義抄』佛上八〇には「太玉串 サカキ」佛下本八二には「龍眼木 サカキ 榊賢木坂木並未詳」のように二通り見られる。『箋注和名抄』一〇には「坂樹 日本紀私記云、天香山之真坂樹(佐加木、漢語抄榊字 本朝式用賢木二字)」とあり、『大漢和辞典』には「榊」国字。さかき。ときはぎの総称。常緑樹の一である。『和漢三才圖会』藝財、倭字には「榊(似檜木以供神前猶浮屠用檜葉)」のようである。

⑮

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

218 聖^{キヨキ} 木^ハ 榲^{カワヤナキ}
 202 聖^{セイナル} 木^ハ 榲^{ヒロム}
 (聖(きよき)木は榲(かわやなき))
 (聖(せい)なる(きよき)木は榲(ひむろ))

『説文解字』には「榲(河柳也从木聖声)」とあり、『玉篇』木部には「榲(敕貞切説文云河柳也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本九〇には「榲(勅鳴反 ムロ・一名 河柳)」のように漢字と和訓が見られる。

⑯

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)

5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

219 木^{フリタルハ} 古^{カルル}
 203 木^{フリタルハ} 古^{カレ}
 (木の古(ふりたる)は枯(かるる))
 (木の古(ふりたる)は枯(かれ))

『説文解字』には「枯(稟也从木古声夏書曰唯箇輅枯木名也)」とあり、『玉篇』木部に

は「枯（苦胡切説文曰稟也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本一〇三には「枯（俗胡反 カル・カラキ・カハク・和音去）」のように漢字と和訓が見られる。又、佛上八五には「古 イニシヘ・和音コ」とあり、佛中六三には「古 イニシヘ・ムカシ」のだけで本文のように「古（ふりたる）」のような漢字と和訓は見当たらない。

⑪

3 慶長二十年梵舜写本（梵舜本）

5 貞享頃刊弘法字尽（貞享版）

- 220 石^{イシ} 高^{タカキハ} 碯^{クツレ} 「石の高は碯（くつれ）」
 204 石^{イシ} 高^{タカキハ} 碯^{クツル} 「石（いし）の高（たかき）は碯（くつる）」

『大漢和辞典』には「碯」かたい。つよい。「碯」に同じである。『龍龕手鑑』入声には「碯碯（苦角反碯鞭也）」とあり、『説文解字』には「碯」と「碯」と「碯」という漢字は見当たらない。『玉篇』石部には「碯（口角切堅固也亦作）」と「碯同上」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』法中六には「碯（口角反）」「碯（塙二或）」とあり、法中二には「碯俗」のように漢字のみ見られる。

⑫

3 慶長二十年梵舜写本（梵舜本）

5 貞享頃刊弘法字尽（貞享版）

- 221 枝^{エダ} 支^{ササヘ} 木^キ 「枝木を支（ささへ）」
 205 枝^{エダ} 支^{ササヘ} 木^キ 「枝（ゑだ）木（き）を支（ささへ）」

『説文解字』には「枝（木別生條也从木支声）」とあり、『玉篇』木部には「枝（之移切枝柯也）」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本一二四には「枝（音支和音 エタ・ワカル・ササフ）」のように漢字と和訓が見られる。

3 慶長二十年梵舜写本(梵舜本)
5 貞享頃刊弘法字尽(貞享版)

222	無 ^{キハ} _レ	手	撫 ^{ナツ}	(手無(き)は撫(なつ))
206	無 ^{ナフシテ} _レ	手 ^テ	撫 ^{ナツル}	(手(て)無(なふ)して撫(なづる))

『説文解字』には「撫(安也从手無声一曰循也)」とあり、『玉篇』手部には「撫(孚武切説文云安也一曰循也)」とあり、『龍龕手鑑』上声には「撫(芳武反安也持也據也疾也又存恤也)」のように漢字は見られる。観智院本『類聚名義抄』佛下本七七には「撫(孚禹反 ナツ・ヒク・ウツ・トル・カク・カイ・オサフ・ヨル・ヤスム・モテアソフ・フル・和音舞)」のように漢字と和訓が見られる。

備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字	備考	類聚名義抄	玉篇	説文解字	漢字
	○	○	○	⑪ 𦵏		○	○	○	① 周
	△	○	○	⑪ 芸	国字	△	×	×	② 梅
	○	○	○	⑫ 笛		○	○	○	③ 李
	△	○	○	⑬ 弦		○	○	○	④ 柯
	△	×	×	⑬ 絃		○	○	○	⑤ 江
国字	○	×	×	⑭ 榘		○	○	○	⑤ 河
	○	○	○	⑮ 檉		○	○	○	⑥ 芝
	○	○	○	⑯ 枯		○	○	○	⑦ 筍
	△	○	×	⑰ 確		○	○	○	⑧ 桐
	○	○	○	⑱ 枝		○	○	○	⑨ 相
	○	○	○	⑲ 撫		○	○	○	⑩ 杏
合計22	22	19	18						

第二節 梵舜本と弘法字尽のみある19句の図

第三章 終りに

『瑠玉集』は中世の漢字学習として記憶しやすく理解しやすいように工夫されて、初学者に対する学習役割を行った。特に序文には修辭に力を入れて本書の成立を詳述し、編者の意図を読み取ることができる。概ねの論調は、本書が初学者のために書かれたものであつて、高度な研究のためのものではないこと、賢者から見れば不完全な書であつても、当時における一般的な表記を採用している可能性も高いし、啓蒙用の書としては役立つことであらう。

『弘法字尽』の調査においては、他の諸本には見られない独自の四四句があり、部首による並びである。そして、各例の頭に掲げた数字は筆者が作成した。前掲、真福寺本・東大本・梵舜本・天和版・貞享版・国会本の順で、六本の対照校本に付したものであり、各々の内部における通し番号をしめたものである。

I. 心部が二十句あり、多めに見て半分を占めている。その漢字を部首に相当する字を除いた三字の中で他の二字を調べた結果、『説文解字』からは、漢字の四九字の中で三五字が見られ、七一%を占める。『玉篇』からは、四九字の中で四三字が見られ、八七%を占める。観智院本『類聚名義抄』からは、四九字の中で四一字が見られ、八三%を占めている。因みに、四四句の中で心部首の二十句は、『説文解字』と『玉篇』と観智院本『類聚名義抄』を総合的に見た結果八十%である。

II. 人部が七句あり、『説文解字』からは、漢字の十四字の中で十三字が見られ、九二%を占める。『玉篇』からは、十四字の中で十三字が見られ、九二%を占める。ここで『説文解字』と『玉篇』は、十四字の中で「𠂔」という漢字のみ見当たらず十三字である。観智院本『類聚名義抄』からは、十四字が全部見られ、100%を占めている。

因みに、四四句の中で人部首の七句は、『説文解字』と『玉篇』と観智院本『類聚名義抄』を総合的に見た結果九四%

である。

Ⅲ. 言部が七句あり、漢字の十五字の中で『説文解字』と『玉篇』と観智院本『類聚名義抄』も十四字が見られ、九三%を占めている。したがって、『説文解字』には「謔」という漢字が見当たらず、『玉篇』には「毎」という漢字が見当たらず、観智院本『類聚名義抄』には「謔」という漢字がそれぞれ見当たらず十四字である。

因みに、四四句の中で言部首の七句は、『説文解字』と『玉篇』と観智院本『類聚名義抄』を総合的に見た結果九三%である。

Ⅳ. その他部の十句あり、康熙字典体順で並べてみると、重複になる部首は骨部二句のみであり、まず一部・人部・十部・口部・目部・示部・肉部・船部などは一句ずつある。このように人間と直接関わりが深い漢字の部首であろう。そして、『説文解字』からは、漢字の二二字の中で十五字が見られ、六八%を占める。『玉篇』からは、漢字二二字の中で十九字が見られ、八六%を占める。観智院本『類聚名義抄』からは、漢字二二字の中で二十字が見られ、九十%を占めている。因みに、四四句の中でその他部首の十句は、『説文解字』と『玉篇』と観智院本『類聚名義抄』を総合的に見た結果八一%である。

しかし、『説文解字』と『玉篇』にも見当たらない漢字は無理やり作った漢字か国字であろう。例えば、「𪛗」という漢字は『新撰字鏡』の「品字様」(同じ字を「品」の字のように三つよせた字、犇・𪛗・𪛗・𪛗その他約四六字)があるにもかかわらず、どの書籍にも見当たらない。

最後に、第二節の梵舜本と弘法字尽のみある独自の十九句があり、『説文解字』からは、漢字の二二字の中で十八字が見られ、八一%を占める。『玉篇』からは、漢字の二二字の中で十九字が見られ、八六%を占める。観智院本『類聚名義抄』からは、漢字の二二字の中で二二字が全部見られ、100%を占めている。

因みに、梵舜本と弘法字尽のみある十九句は、『説文解字』と『玉篇』と觀智院本『類聚名義抄』を総合的に見た結果八九％である。その中には、国字という「拇」と「桺」の漢字が二字含めてあり、『説文解字』と『玉篇』にはやはり見当たらない。又、漢字の部首に片寄りがあるので部首別に分けてみると、十九句の中で木部が一番多く十句あり、草部と竹部が十九句の中で二句ある。他には口部・水部・糸部・石部・手部などは一句ずつである。

今回本文に標出されている漢字の字体を『説文解字』と『玉篇』と觀智院本『類聚名義抄』で調査した結果、觀智院本『類聚名義抄』が九三％で多く占める。次は『玉篇』で八八％を占める。『説文解字』は八一％を占めている。このように三冊ともに『弘法字尽』を八十％以上占めていることが分かる。

漢字の部首の対象は当然自然であるように、自然そのものを教える対象になっている。人間の気持ちを表す「心」を持つて「人」々などのように物「言」をいうのか、人間が生活するうえでどのように感じて活動するか、を編者が活躍したと思われる年代を手がかりに、主眼を置いて同様の調査を進めて行かねばならない。又、漢字学習書であることを考察するのに興味深いものであろう。

注・参考文献

- ①『日本国語大辞典 第二版』、株式会社小学館、二〇〇一年五月二十日
- ②『大漢和辞典』、諸橋轍次著、大修館書店、平成六年五月一日
- ③『学研 漢和大字典』、藤堂明保編、株式会社学習研究社、一九七八年四月一日
- ④『類聚名義抄 全二巻』、正宗敦夫校訂、株式会社風間書房、昭和六十一年十二月十五日
- ⑤『古本節用集六種研究並びに総合索引』、中田祝夫著、風間書房、昭和四三年四月一日
- ⑥『日本教科書大系 往来編 別巻 往来物系譜』、石川松太郎著、株式会社講談社、昭和四五年十一月三十日
- ⑦『往来物の成立と展開』、石川松太郎著、株式会社雄松堂出版、一九八八年七月二五日
- ⑧『説文解字注附索引・精装全一冊』、段玉裁著、藝文印書館、中華民國六十八年六月五版
- ⑨『説文解字 附檢字』、(漢) 許慎撰、(宋) 徐鉉校定、北京中華書局、一九九八年一〇月
- ⑩『大廣益會玉篇』、(梁) 顧野王著、中華書局出版、一九八七年七月
- ⑪『校正宋本廣韻 附索引』、陳彭年等重修者、藝文印書館、中華民國八十年三月
- ⑫『国語学大辞典』、国語学会、東京堂出版、昭和五五年九月三十日
- ⑬『国語学研究事典』、佐藤喜代治著、明治書院、昭和五二年一月五日
- ⑭『康熙字典』、中華書局香港分局、一九八七年四月重印